環境科学科

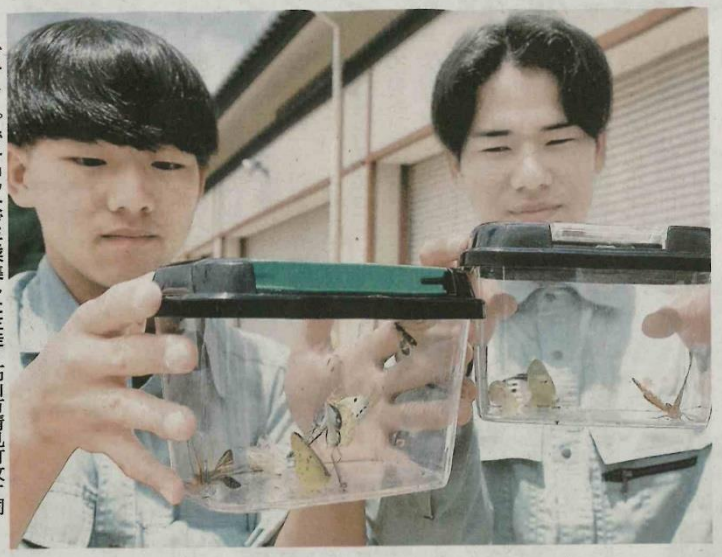
ビオトープで「飛騨の森再生」

動植物の生息、環境調査

ビオトープの生態系確認

飛騨高山高生が生物調査

飛騨高山高校（高山市）の環境科学科の2年生20人が16日、同市清見町牧ケ洞の中部縦貫自動車道高山西インターチェンジ内にあるビオトープ「飛騨の森再生」で、チョウなどの昆虫類や水生生物を採集し、観察した。（玉田健太）



ビオトープでチョウなどを採集した生徒＝高山市清見町牧ケ洞

高山西ＩＣ内　アカハライモリなど採集

ビオトープは、同自動車道高山清見道路の建設に伴う環境保全対策の一環で、２００４年に整備された。10年には、高山国道事務所と同校が「維持管理に関する協定」を結び、生徒らが動植物の生息、生育環境創生などに取り組んでいる。

この日は、生徒がビオトープ内の池に入り、水中生物を調査。オタマジャクシやアメンボ、アカハライモリなど約10種類が見つかり、中には約20㌢のドジョウを捕まえた生徒もいた。

続いて、虫取り網を手にビオトープ内を駆け回り、チョウなどを採集。モンシロチョウやモンキチョウといった7種類のチョウの他に、トンボやバッタ類の生息も確認した。

森前秀太さんは「岐阜県は自然が豊か。こういった環境をいつまでもしっかりと保全していくことが大切だと感じた」と話した。

ビオトープ内の池で水生生物を探す生徒＝同

岐阜新聞社　　令和５年６月１７日（土）